

## 目は心の窓

今から十数年前、私は県立日南高等学校に入学した。中学から始めた陸上競技を続けた  
いと思い、迷わず陸上部へ入部した。練習初日、運動場へ行くとK先生が立っており、挨拶  
をしに先生に近づくと「目は？」と尋ねられた。K先生の意図がわからず答えられずに  
いると「目は口ほどに物を言う。」と言われた。この言葉を聞いても当時の私は、なぜK  
先生がこのようなことを言ってきたのかがわからなかった。

それから私は進路のことで悩むようになり、先生や友人に相談することなく一人で抱え  
込んでいた。次第に、学校へ行くことが嫌になり学校から足が遠退いていった。K先生は  
心配して何度も電話をくださったが、私は放っておいてほしく電話に出ることはなかった。  
そして高校2年生の夏、自暴自棄になり退学届を書いた。この時、私は初めてK先生の涙  
を見た。「自分の為に泣いてくれる人がいる。自分のことをこんなに考えてくれる人がい  
る。もう少し先生のために頑張ってみようかな。」と思い、退学届を握りしめながら泣き  
じゃくっていた。残りの高校生活は、勉強と部活動の両立に励み高校を卒業することがで  
きた。

私は、K先生との出会いがきっかけで教員を目指すようになった。高校卒業後すぐには  
進学できなかったが、アルバイト等で学費を貯めて進学し教員免許状を取得した。

私は現在非常勤講師をしている。高校入学当初にK先生が「目は口ほどに物を言う。」  
と私に言った理由が今ならわかる気がする。きっと、私の心の中に抱え込んだ悩みや不安  
が顔に表れていたのだと思う。今もK先生とは連絡を取り合っている。私にとってK先生  
は恩師であり、目標であり、また、父のような存在だ。

黒木 葵

(一般)